

昭和三十年度平城宮跡発掘調査概報

Kayaya

奈良国立文化財研究所では奈良縣教育委員会の協力を得て、昭和三十一年八月一日から十三日まで平城宮跡大極殿跡東南の回廊角の発掘を行つたので、その概要を報告する。

平城宮跡の発掘調査は昨年一月、大極殿跡北方約二百米にある道路改修工事に伴う遺跡の発見に端を発するのであるが、今回はその時得られた諸を追うこと止め、先ず大極殿を中心とする所謂朝堂院の外廊を明らかにする目的をもつて、大極殿跡東南の回廊角附近より始めて、十二塙を包む一廓の東北角を求める方針を取つた。

ここを進んだ今一つの理由は嘗て大正十二年平城宮跡の保存工事に際し、凝灰岩石敷例が発見されていて、これを手掛かりにすることから來るからでもあつた。この中南北に平行してでいる二条の石敷列の間隔をとつてみると凡そ三十三尺程あつて、その間に回廊が存在していたことを推定されるのである。

かくして大極殿跡東南方で発見された二条の南北石敷とその南で、これに直角に交わる東西石敷を先に掘出し、二条の石敷の中間をさぐりと早想通り礎石や礎石掛け跡が現われ梁間二十尺、柱間隔十二尺複廊跡であることがわかつ、石敷は雨落溝に当るこが知られた。更にその南を限る東西の石敷の南方でも礎石掛け跡を探したところ複廊がこの部に延び、西に折れて大極殿の前方を限つていたことが明らかになつた。

次にこれらから東方に延びて十二塙を囲う回廊を探したのであるが、大極殿東回廊の東側の溝敷石は同南回廊の北側の角と直角に交つていて、東方に分歧せず、その北方約十

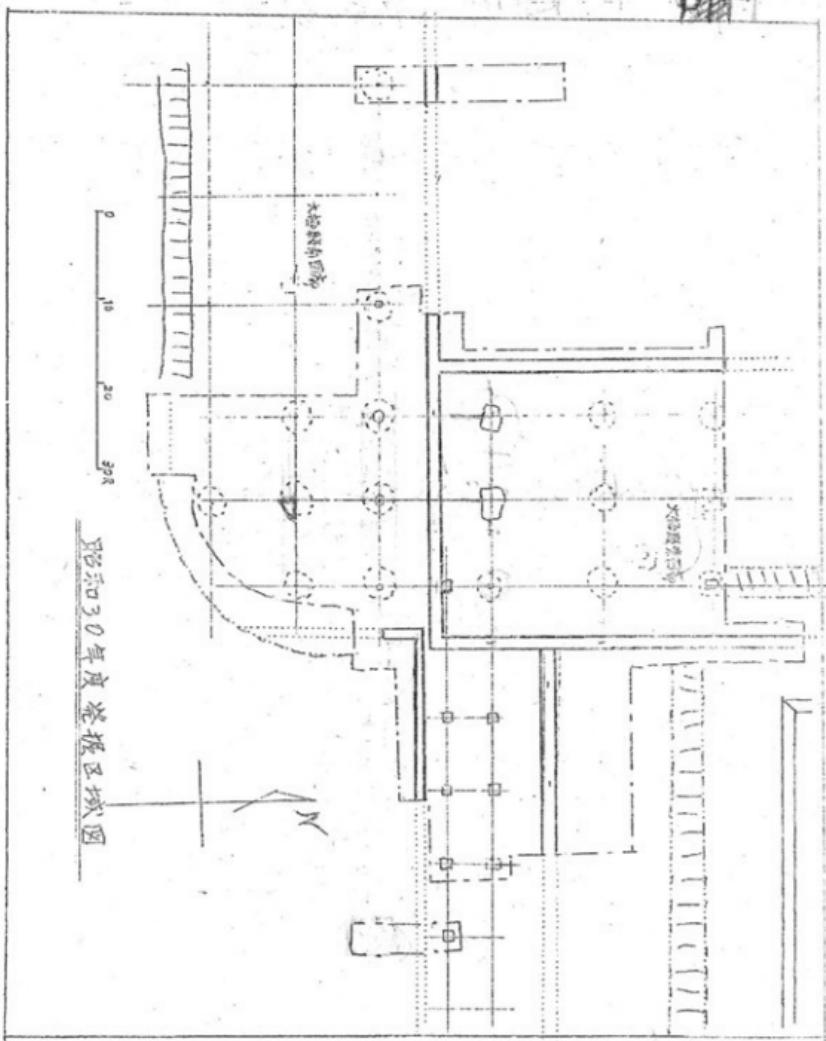
三尺程して東方に溝が分れていたことが、土質によつて判明した。それ故にこの溝の南
側は北に回廊を走るべきであると判断されたのであるが、北では礫石跡が現れないので、そ
の中に大極殿東回廊東側溝が前回廊外北側で西に折れる角の南方崖の下で凝灰岩、地覆
石が現れ、こなかこの奥を入つにして南と東に延びていることが判つた。そうとすれば
大極殿南回廊はここで終り、それが藤原宮跡で見出されていたようにその儘東へ続かな
いことは明らかである。現地形からしても約四尺にも及ぶ崖は南回廊の略前端を限つて
おりこの地吳で、北方に後退して東に向つていろので、南回廊の段が前方へ突出してい
る形勢を伺い得る。かくして東方ではこの高い基壇と先の東西溝に嵌まる市約十五尺
程の壇が出来るのであるがこの壇上から柵穴のある一尺余りの礫石が約五尺をへだて
て二列発見された。その間隔は八尺六寸程であり、その位置は正に崖下で発見された基
壇地盤に残された東柵と一致するのである。この他回廊の壇上的一部には凝灰岩の石數
個残されており、東方に延びる狭い壇上にも凝灰岩を敷かれたらしい形跡が見られる。
(凝灰岩の粉末が旧地表と見らわれる部分に残つてゐる。)

この結果によると、大極殿の周囲が回廊で囲まれていることは藤原宮の場合と同様であ
るが、その前回廊が藤原宮のように東方に延びていない点が異なり、又それより東方
に達なる回廊らしいものかなくて狭い壇上に不明な構築物の跡の見らわれる点は平安宮の
場合とも全く趣を異にしてゐる。

平城宮は恭仁や難波遷都後の復都の地、平城天皇の奈良復都運動等もあつて、遷都に
改葬の痕跡の残る可能性もあるので、その奥特に注意を怠らなかつたのであるが、礫石

に凝灰岩のものと花崗片麻岩ないし西輝石安山岩自然石のものの混じていろ瓦が見出された他、著しい事實は見出されなかつた。後者の礫石は後に据え改められ形跡が認められるのである。その終平城宮建設前の遺跡として、東回廊壇表土下から蓋(きぬき)重形象埴輪が見出された。

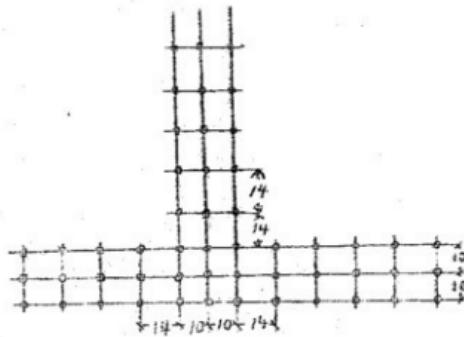
遺物としては夏の他土器、陶質土器等の破片が見出されるのみであるが、文様瓦は二種に止まり、何れも侯系平城宮跡より多く見出されているものである。
尚当初の計畫では十二室を圓む四廊の東西隅を出すつもりであったが、東方へ向四廊が現れず、形勢が變つて来たのと遺跡がよくのこつていて詳細を露出する必要が認められため、発掘範囲を限定して、調査の徹底を期した次第である。



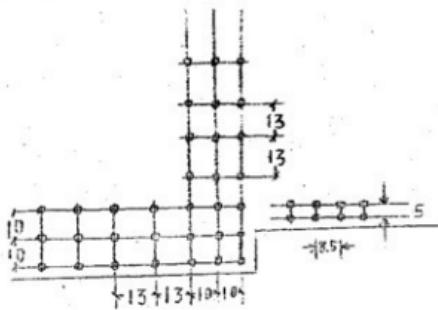
1960和1970年度
營振區域圖

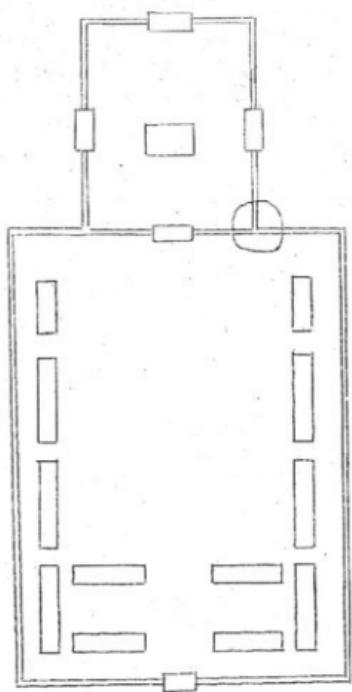
[卷堀地卓部分図]

藤原宮 [本年平城宮登堀地卓上同部分]

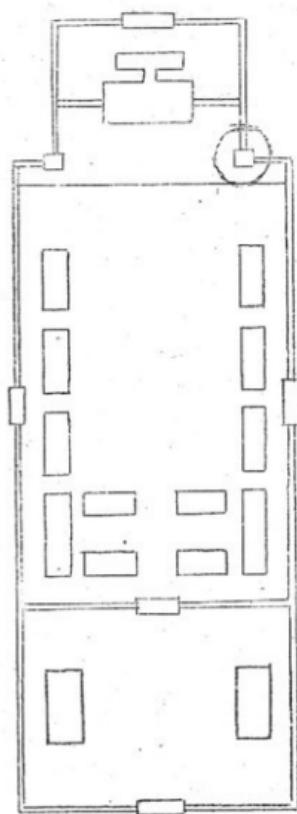


本年平城宮登堀地卓復原図





藤原宮 復原図



平城官 想定図
〔関野貞氏による〕